

# 『源氏物語』にみえる「錦」の比喩

三宅 えり

一、春秋の景物を「錦」にたとえる

二、人々の様子を「秋の錦」「春の錦」にたとえる

三、住吉詣の人々の描写

四、まとめ

春の花が咲き乱れる美しさや、紅葉の美しさを「錦」にたとえることは、古く『万葉集』や『懷風藻』の詩歌にもみられ、『古今集』や『文華秀麗集』等、平安朝の詩歌にも受け継がれている定型的な比喩である。

『源氏物語』には、自然の美しさを「錦」にたとえる表現もみられるが、宴に集った錦を纏う人々の様子を自然の美景にたとえる表現もみられる。「濯標」、「若菜下」の住吉社頭での宴の場面、「初音」の六条院での男踏歌の場面、そして「胡蝶」における六条院での船楽の場面である。これらの場面は光源氏が権力を掌握していることを示す重要な場面である。光源氏の周囲に集う人々を自然の美景にたとえることは光源氏に天の造化と同等のものを生み出す力があることを示すのだろう。

また、「錦」にたとえられる明石上の存在についても考察する。

## 一、春秋の景物を「錦」にたとえる

『源氏物語』<sup>〔1〕</sup>には、春の美しさ、秋の美しさを「錦」のたとえで描写する場面がある。

「若紫」では、瘡の治療に訪れた北山の風景を、

明けゆく空はいといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなく囀りあひたり。名も知らぬ木草の花どもいろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くもめづらしく見たまふに、なやましさも紛れはてぬ。

と描写する。春の美しさは色とりどりの落花に代表され、錦にたとえられている。『紫明抄』、『河海抄』は「花のかげたたまくをしきこよひかな錦をしけるにはと見えつつ」（後拾遺集・春下・一三九番・花の庭に散りて侍りける所にてよめる・清原元輔・第四句「錦をさらす」）を引く。

「藤裏葉」では、冷泉帝、朱雀院が六条院に行幸した時の様子を

夕風の吹き敷く紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見まがふ庭の面に、容貌をかしき童への、

やむごとなき家の子どもなどにて、青き赤き白橡、蘇芳、葡萄染など、常のごと、例の角髪に、額ばかりのけしきを見せて、短きものどもをほのかに舞ひつつ、紅葉の蔭にかへり入るほど、日の暮るるもいと惜しげなり。

と描写する。六条院の美しさを表すものとして、「錦」のように散り敷く紅葉を描く。

以下、春秋の景物を「錦」とたとえる背景について考えていきたい。

「薄雲」には、光源氏が斎宮女御に春秋の優劣を論ずる場面がある。

はかばかしき方の望みはさるものにて、年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともしはべりしにがな。春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらそひはべりける、そのころのげにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらぎなれ。唐土には、春の花の錦にしくものなしと言ひはべめり、大和言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りてえこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。

点線部のように、花、紅葉の美しさを比べて春秋の優劣を判じようとしている。そして、春を代表する景物「花」は、傍線部「唐土には、春の花の錦にしくものなし」とあるように、「錦」にたとえられる。「春の花の錦」は、陳の李爽「賦得芳樹」(芸文類聚・木部・木)に「春至花如錦、夏近葉成帷」、中唐の劉禹錫「春日書懷、寄東洛白二十二、楊八二庶子」に「野草芳菲紅錦地、遊糸繚亂碧羅天」(千載佳句・四時部・春興、和漢朗詠集・春興・一九番)とあるように、中国詩の表現をふまえたもの。<sup>(4)</sup>春に咲いている木や草の花、または落花のたとえとして「錦」を用いることは、中国詩の典型的な比喻である。日本漢詩でも、『懷風藻』<sup>(5)</sup>(九四番・藤原万里・五言。暮春於第園池置酒)に「天霽雲衣落、池明桃錦舒」、『文華秀麗集』<sup>(6)</sup>(二〇〇番・藤原冬嗣・奉和河陽十詠。河陽花)に「吹入江中如濯錦、乱飛機上奪文紗」、『和漢朗詠集』(春興・二三番・島田忠臣)に「林中花錦時開落、天外遊糸或有無」とあるなど、「春の花」を「錦」にたとえることは一般的である。一方、和歌の例は、早く『万葉集』(巻六・一〇五三番)に「(前略)うぐひすの 来鳴く春へは 巖には 山下光り 錦なす 花咲きををり(後略)」の一例があるが、後続の例は多くはない。<sup>(7)</sup>

「薄雲」の波線部、「大和言の葉には、秋のあはれをとり

たてて思へる」に対して『河海抄』は、春秋の優劣を論じた先例である『万葉集』(巻一・一六番・額田王)の「天皇詔内大臣藤原朝臣、競憐春山万花之艶秋山千葉之彩」詩、額田王以「歌判之歌」と題する長歌を挙げる。<sup>(8)</sup>

冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ  
咲かざりし 花も咲けれど 山をしみ 入りても取  
らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見て  
は 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ  
嘆く そこし恨めし 秋山そ我は

「薄雲」の点線部同様、春の花、秋の紅葉の優劣を比べ、「黄葉」への愛着を述べ、「秋山そ我は」と秋の優位性を詠む。春の花に對抗する秋の「紅葉(黄葉)」もまた、「錦」にたとえられる。

中国詩においては、「錦」は本来、「春の花」をたとえるものであったが、日本では「秋の紅葉」のたとえに使われるようになる。紅葉あるいは落葉をたとえる。『懷風藻』(六一番)に収められた大津皇子「七言。述志。一首」の「天紙風筆画雲鶴、山機霜杼織葉錦」は、その早い例。なお、中国詩では、紅葉の美しさを詠む詩自体がほとんどなく、よって「紅葉」を「錦」にたとえる例を見つけ

るのは困難である。<sup>9)</sup> 日本漢詩では、前掲、大津皇子の作例以来、『和漢朗詠集』（紅葉・三〇三番・慶滋保胤）に『洞中清浅瑠璃水、庭上蕭条錦繡林』とあるなど多数の例がある。和歌の例も、『万葉集』（巻八・一五一二番・大津皇子）に「経もなく緯も定めず娘子らが織るもみち葉に霜な降りそね、『古今集』（秋下・二八三番）に「龍田河紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかや絶えなむ」とあるように、用例が多く、「春の花」を「錦」にたとえた和歌の例が少なくことは対照的である。たとえば、『古今和歌六帖』は「第五帖・錦綾・にしき」（三五・一五）「三五三〇番」に十六首の歌が収めるが、うち十三首（古今歌三首、後撰歌十首）が「紅葉」を「錦」にたとえた歌であり、「花」を「錦」とたとえる例はない。

『源氏物語』が春秋の景物を「錦」とたとえるのは、詩語、歌語の用法をふまえたものである。『源氏物語』に先行する散文（物語の地の文）では「うつほ物語」に「紅葉」を「錦」にたとえるものが数例あるが、「花」を「錦」にたとえる例は未見。「若紫」の北山の春景をわざわざ「錦」にたとえた意義について考察したい。<sup>12)</sup>

渡辺秀夫氏は、龍田姫が腕によりをかけて、「もみじ」で「錦」を織るとした上で以下のように述べる。

「機<sup>はた</sup>〔はたを織る道具〕もなき錦」「織らぬ錦」へ後撰・秋下・三八六・四〇三とは、そうした、人為を超えた神威のみごとな巧緻を讃えたもの。紀貫之の『大井川行幸和歌序<sup>おおいがわぎょうこうわかしよ</sup>』のなかで、美しく色づいた秋の山々の眺めを「織る人なき錦」に見まごうばかりといい表すのも同じこと。このようにいい方は、中国詩文に見られる発想。たとえば、仙人（道士）の着る衣を「霞の衣は縫ふを待たず、雲の錦は織るを須<sup>ま</sup>たず〔彩<sup>いろ</sup>鮮やかな霞（夕焼け・朝焼け）や雲で織りあげた天然の錦の衣〕」（沈約・和劉中書仙詩）というような表現——を応用したものであろう。

「紅葉の錦」は人為を超えた産物として詠まれること指摘している。「春の花の錦」も『類聚句題抄』に「花錦不<sup>レ</sup>須<sup>レ</sup>機<sup>はた</sup>」の題がみられるように、「紅葉の錦」同様、人為を超え、自然の妙が織りなすものと考えられる。「若紫」に描かれた北山の春の落花の錦は、病が癒える環境の霊威、まさに自然の神威を示すものであろう。

## 二、人々の様子を「秋の錦」「春の錦」にたとえる

前章では、詩語、歌語同様に『源氏物語』の中で自然の景物が「錦」にたとえられる例を確認したが、『源氏物語』

には、人々の様子を「秋の錦」「春の錦」にたとえる例もみられる。

「松風」では、秋に光源氏の桂の別荘を訪れた人々の姿が次のように描かれる。

け近ううち静まりたる御物語すこしうち乱れて、千年も見聞かまほしき御ありさまなれば、斧の柄も朽ちぬべけれど、今日さへはとて急ぎ帰りたまふ。物ども品々にかづけて、霧の絶え間に立ちまじりたるも、前栽の花に見えまがひたる色あひなどことにめでたし。近衛府の名高き舍人、物の節どもなどさぶらふに、さうざうしければ、「その駒」など乱れ遊びて、脱ぎかけたまふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと思ゆ。

傍線部「秋の錦」は、紅葉のこと。『うつほ物語』（菊の宴）に、「九月。紅葉見る人の山辺にあり。田刈り積み」という詞書を持つ屏風歌として中将実頼が詠んだ「織り敷ける秋の錦にまとゐして刈り摘む稲をよそこそ見れ」の例がある。「松風」の当該箇所においては、桂の院での光源氏主催の宴の後に緑として与えられた色とりどりの錦を被いて人々が乱れる様を紅葉が風に乱れる様にたとえる。

「錦」の語は用いられてないが、傍線部「前栽の花」も

『本朝麗藻』（六八番・慶滋為政・秋日遊<sup>三</sup>東光寺<sup>四</sup>各成<sup>四</sup>韻<sup>二</sup>）に「籬下寒花紅錦繡、池中秋水碧瑠璃<sup>五</sup>」とあり、「錦」とたとえられる可能性がある。また、『貫之集』（三四六番）に「秋の野のちくさの花は女郎花まじりて織れる錦なりけり」とあるように秋の野の花を「錦」とたとえることがある。よって、「松風」のこの場面は緑として与えられた錦を背負った人々の点景を秋の前栽の花の錦に見立てているものと考えられる。この前日、光源氏を慕って、桂まで追いかけてきた中将が「山の錦はまだしう侍りけり。野べの色こそ盛りに侍りけれ」と語っており、その折の自然の美しさを再現したことになる。光源氏の周囲に集う人々の様子を「織らぬ錦」にたとえることは、光源氏に天の造化と同等のものを生み出す力があることを示す。

点線部「斧の柄も朽ちぬべけれど」は『述異記』に見られる王質爛柯の故事をふまえたもの。晋の時代に王質という人物が、信安郡の石室山に木を伐りに入った時に数人の童子が囲碁をしているのに出会い、一局が終わらないうちに帰ってきたが、斧の柄が爛れてしまい、同時代の人々は皆おらず、山中（仙界）と下界の時の流れの違いを知る、というのがその大意である。「松風」には、桂の院に行くという光源氏の言に対し、明石上に逢いにいくのだと察した紫上が「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠

に<sup>①6</sup>」と言う場面がある。明石上（実際には大堰に居住）と過ぐす楽しい時間は、仙界で過ぐすのと同じようなものだから、下界で一人待つ紫上にとっては耐え難いほどに長くなるだろうと嫌味を言うのである。結局、光源氏は大堰で過ぐした後、彼を慕って集まってきた公達と桂の院で一泊することになる。その桂の院での宴の様子が前掲「千年も見聞かまほしき御ありさまなれば、斧の柄も朽ちぬべけれど」と描写される。桂の院そのものが時の流れが下界と異なる仙界のように描かれるのである<sup>①7</sup>。

光源氏がいる所を仙境に見立て、なおかつ、そこに集う人々の様子を「織らぬ錦」にたとえる場面が「胡蝶」にもある。六条院での船樂の場面である。

三月の二十日あまりの頃ほひ、（中略）こなたかなた霞あひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色を増したる柳枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。（中略）水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもをくひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に文をまじへたるなど、物の絵様にも描き取らまほしきに、まことに斧の柄も朽い、つべう思ひつつ日を暮らす。（中略）ここのしつらひ、いと事そぎたるさまに、なまめかしきに、御

方々の若き人どもの、我劣らじと尽くしたる装束、容貌、花をこきませたる錦に劣らず見えわたる。

点線部「斧の柄も朽いつべう」等の表現から、船樂が催される六条院が仙境として描かれているとすでに多くの指摘がある<sup>①8</sup>。傍線部「花をこきませたる錦」に対し、『紫明抄』、『河海抄』は「見渡せば柳桜をこきませて都ぞ春の錦なりける」（古今集・五六番・花盛りに、京を見遣りて、よめる・素性法師）を引く。「胡蝶」のこの部分は六条院で紫上と秋好中宮に仕える女性たちの姿を「春の花の錦」とたとえ、「松風」では男性たちを「秋の錦」とたとえるのに対応する表現である。

傍線部「霞あひたる梢ども、錦を引きわたせるに」は風景描写である。『和漢朗詠集』（霞・七六番・菅原道真）に「鑽沙草只三分許、跨樹霞纔半段余」という佳句がある。この六条院の霞を「春霞色の千種に見えつるはたなびく山の花のかげかも」（古今集・春下・一〇二番・寛平御時きさいの宮の歌合の歌・藤原興風）と同じ発想とみて、霞に春の花と新緑が映る様子が錦のように見える、と解釈したい。前掲の興風歌は『新撰万葉集』<sup>①9</sup>（巻上・春・13番（歌二五二））にも収められ、「霞光片々錦千端、未弁名花五彩斑、遊客廻眸猶誤道、応斯丹穴聚鵲鸞」という漢詩が



付けられている。中国詩においては、朝焼け、夕焼けを表す鮮やかな「霞」を初唐の駱賓王「和李明府」に「霞殘疑製錦、雲度似飄縷」とあるように「錦」とたとえる。前掲の『新撰万葉集』の詩歌は日本の白い春霞を漢語の「霞」に近づけようという発想から作られたものである。<sup>(20)</sup>

『うつほ物語』春日詣には社頭での歌会の序に「朝の霞緑の衣なり、夕べの雲黄なる錦なり」とあり、「朝の霞緑なり」の題で右近少将源仲頼の「鶯の羽風を寒み春日山霞の衣今朝はたつかも」、「雲の錦」の題で少将元方の「大空に風の織り敷く錦をば谷より雲ぞたち渡るらし」の歌を収める。漢詩において「霞」、「雲」を衣や錦にたとえる詠み方をふまえ、「霞」に関しては、周囲の景物を映じる和語の「かすみ」の意も反映して、新緑を映ずる「緑」の「霞」を題としている。以上のことをふまえて、この「胡蝶」にみられる六条院の「霞」は春の花と新緑を映じた錦にたとえられたものと考ええる。この「胡蝶」に描かれる「霞」と同様のものが、「初音」にみられる。

影すさまじき暁月夜に、雪はやうやう降り積む。松風木高く吹きおろし、ものすさまじくもありぬべきほどに、青色の萎えはめるに、白襲の色あひ、何の飾りかは見ゆる。かざしの綿は、にほひもなき物なれど、所

からにやおもしろく、心ゆき命延ぶるほどなり。殿の中将の君、内の大殿の君たち、そこらにすぐれて、めやすく華やかなり。ほのぼのと明けゆくに、雪や散りてそぞろ寒きに、竹河うたひてかよれる姿、なつかしき声々の、絵にも描きとどめがたからんこそ口惜しけれ。御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたき、物の色あひなども、曙の空に春の錦たち出でにける霞の中かと見わたさる。あやし

く心ゆく見物にぞありける。

これは、六条院で男踏歌を見物する場面である。見物の六条院の女性達の出だし衣を「曙の空に春の錦たち出でにける霞」と表現する。この「霞」は朝焼けを意味する漢語の「霞」の赤のイメージと前述の花や新緑を映じた日本の春霞のイメージが重なった鮮やかなたとえである。前半の白を基調とした男踏歌の情景とは対照的である。前章で引用した渡辺秀夫氏の論考に「仙人（道士）の着る衣を「霞の衣は縫ふを待たず、雲の錦は織るを須<sup>ま</sup>たず（彩鮮やかな霞（夕焼け・朝焼け）や雲で織りあげた天然の錦の衣）」へ沈約・和劉中書仙詩」という」とあったように霞の衣とは仙人の衣をいう。「曙の空に春の錦をたち出でにける霞」のような衣をまとう六条院の女性達も仙女のようにとらえら

れているのではないか。また、『本朝麗藻』（一番・藤原伊周・三月三日侍宴、同賦問柳発紅桃、応製）に「碧玉簾中裁錦妓、青羅帳後擎燈人」とあり、「裁錦」は政治に携わることのたとえであることから、簾の中の皇后を「裁錦妓」、「錦を仕立てた衣を着た女性」と表現する<sup>②</sup>。「曙の空に春の錦たち出でにける霞」のような出だし衣の持ち主は皆、帝にも匹敵するような力を持った光源氏を支える女性たちである。霞の衣をまとった仙女のような女性たちが光源氏を支える六条院はやはり仙境のような場所なのである。

『栄花物語』は「御賀」で倫子の六十賀に集った女性達の出だし衣を「御方々の女房こぼれ出でたるなりども、千歳の籬の菊を匂はし、四方の山の紅葉の錦を裁ち重ね、すべてまねぶべきにあらず」と「紅葉の錦」にたとえるが、「わかばえ」では、妍子の大饗での女房達の出だし衣を「色々の錦を枕冊子に作りて」とあり、自然の景物になぞらえるこだわりはなさそうである。また、「松風」の桂の院の宴や六条院での「胡蝶」の船樂や、「初音」の男踏歌見物の描写のように人々の姿を自然の景物の「錦」にたとえる例は、散見では見つけることができなかつた。

花、紅葉、霞といった「織らぬ錦」は本来、人為を超えた自然の産物である。ところが、『源氏物語』では桂の院

や六条院といった光源氏の居所<sup>②</sup>に彼を慕って集う人々の様子によって花、紅葉、霞といった「織らぬ錦」が再現されるのである。人々を「錦」にたとえることによって、主の光源氏に天の造化と同等のものを生み出す力があることを示す。

### 三、住吉詣の人々の描写

『源氏物語』では、住吉詣が二度描かれ、そこでは直接「錦」の語はみられないが、「錦」に見立てられるような自然の風景に人々の様子をなぞらえる。

「潞標」には、須磨・明石から無事に帰京を果たし、内大臣となった光源氏が住吉社にお礼参りに行った様子が描かれる。そこでは、以下のように一行の華やかな様子が自然の美しさにたとえられる。

その秋、住吉に詣でたまふ。（中略）松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆる袍衣の濃き薄き数知らず。六位の中にも蔵人は青色しるく見えて、かの賀茂の瑞垣恨みし右近将監も靱負になりて、ことごとしげなる隨身具したる蔵人なり。良清も同じ佐にて、人よりことにもの思ひなき気色にて、おどろおどろしき赤衣姿いときよげなり。すべて見し人々ひきかへ華



やかに、何ごと思ふらむと見えてうち散りたるに、若やかなる上達部、殿上人の我も我もと思ひいどみ、馬鞍などまで飾りをととのへ磨きたまへるは、いみじき見物に田舎人も思へり。

須磨・明石に同行し、ともに苦勞した右近將監、良清を含む光源氏の家来達の姿が、色とりどりの紅葉、秋の花を散らしたような華やかな光景であるとする。

また、「若菜下」には、同じく住吉社に詣でた光源氏一行の様子が以下のように描写される。

十月中の十日なれば、神の斎垣にはふ葛も色変りて、松の下紅葉など、音にのみ秋を聞かぬ顔なり。ことごとしき高麗、唐土の樂よりも、東遊の耳馴れたるは、なつかしくおもしろく、波風の声に響きあひて、さる木高き松風に吹きたてたる笛の音も、外にて聞く調べには変りて身にしみ、琴にうち合はせたる拍子も、鼓を離れてとのへとりたる方、おどろおどろしからぬも、なまめかしくすごおもしろく、所がらはまして聞こえけり。山藍に摺れる竹の節は松の緑に見えまがひ、かざしの花のいろは秋の草に異なるけぢめ分かれで何ごとにも目のみ紛ひいろふ。求子はつる末に、

若やかなる上達部は肩ぬぎておりたまふ。にほひもな  
く黒き袍衣に、蘇芳襲の、葡萄染の袖をはかにひき  
綻びしたるに、紅深き相の袂の、うちしぐれたるにけ  
しきばかり濡れたる、松原をば忘れて、紅葉の散るに  
思ひわたさる。

さまざまな色の「かざしの花」を秋草の彩り、光源氏を慕う上達部の装束の彩りを散る紅葉の彩りにたとえる。秋草も紅葉も前述のとおり、「錦」にたとえられるものである。

桂の院や六条院といった自身の居所に限らず、住吉社の社頭においても、光源氏の天の造化と同等のものを生み出す能力は発揮されている。ただし、住吉社の社頭においては「錦」に見立てられる彩りに合わせて松が描かれている。常緑の松は住吉社の神威を示すものである。そこに、時にはその松の緑を凌駕するほどに、源氏一行の作り出す秋草、紅葉に見まがう彩りが添えられているのである。神威を示す常磐の緑と人為による色の移ろう「秋草」、「紅葉」が調和することから、光源氏の栄華が神によって約束されていることが窺える。

「若菜下」の住吉詣の時には、光源氏自身は准太上天皇、娘の明石姫君は女御、その第一皇子は東宮となっており、一族は栄華を誇る。紫上、明石上、明石女御、明石の尼君

をもともなつての住吉詣であつた。そうした女性達の出だし衣は、次のように描写される。

松原に、はるばると立つつづけたる御車どもの、風に  
うちなびく下簾の隙々も、常磐の蔭に花の錦をひき加  
へたと見ゆるに、袍衣のいろいろけぢめおきて、を  
かしき懸盤とりづきて物まゐりわたすをぞ、下人など  
は、目につきてめでたしとは思へる。

出だし衣は「花の錦」<sup>(23)</sup>とたとえられ、一章で挙げた「初音」の男踏歌見物の際の出だし衣を「曙の空に春の錦たち出でにける霞」とたとえることと類似する。また、ここでも「常磐（の松）」と「花の錦」の彩りが調和することが描写される。住吉詣に同行している女性たちは光源氏の栄華を特に支えている女性たちである。このうち、「錦」とたとえられる明石上に注目したい。

「松風」では、明石上を都に送り出す明石入道が、娘の身の上について、

君のやうやうおとなびたまひもの思ほし知るべきにそ  
へては、などかう口惜しき世界にて錦を隠しきこゆら  
んと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに、

仏神を頼みきこえて

と、優れた性質を持つ明石上を「錦」にたとえ、田舎で育つことを「錦を隠しきこゆ」とし、その甲斐のなさを嘆いている。『源氏積』、『奥入』は「富貴不<sub>レ</sub>帰<sub>二</sub>故郷<sub>一</sub>如<sub>二</sub>衣<sub>レ</sub>錦夜行<sub>一</sub>」を引き、『史記』と注記する。『紫明抄』と『河海抄』は同じ引用に「朱買臣伝」と注記する。『古今集』（秋下・二九七番・北山に、もみぢ折らむとてまかれりける時に、よめる・紀貫之）に「見る人のなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」とある。『芸文類聚』（錦）に「漢書曰（中略）項羽曰（中略）富貴不<sub>レ</sub>帰<sub>二</sub>故郷<sub>一</sub>如<sub>二</sub>衣<sub>レ</sub>錦夜行<sub>一</sub>」とあることから、『史記』項羽本紀をふまえた歌とされる。ただし、現行の『史記』項羽本紀は「富貴不<sub>レ</sub>帰<sub>二</sub>故郷<sub>一</sub>如<sub>二</sub>衣<sub>レ</sub>繡夜行<sub>一</sub>」。歌意は見る人がいないまま散つてしまふ奥山の紅葉は夜に錦を着て帰るように甲斐のないことだという。『賢木』では、この歌同様に、光源氏が「山づとに持たせたたまへりし紅葉」を藤壺に献上した時に、「紅葉は、ひとり見はべるに錦くらう思ひたまふればなむ。をりよくて御覽せさせたまへ」という手紙を付け、一人で見ているだけでは、紅葉の美しさの甲斐がないので、是非御覧になつてほしいという。

また、「落標」では、明石姫君五十日の祝いについて、

「この御使なくは、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ」と表現する。「闇の夜」は「闇夜の錦」のこと。「史記」の故事をふまえたもの。姫君誕生五十日のせつかくの歓びも、光源氏からの使いがなかったら「闇夜の錦」のように甲斐のないことだ、とする。

明石上親子は、優れた美質を持ちながら、田舎に沈倫する残念な存在にとらえられており、実際、前掲の「澤標」の住吉詣では、光源氏の住吉詣と同時に明石より住吉詣にでかけた明石上が描かれており、点線部「田舎人」こそが明石上その人であり、光源氏の威勢に圧倒されている。

一方、『若菜下』の住吉詣は「夜の錦」にたとえられた明石上とその娘、さらには明石上の母尼君が「花の錦」の一画を担い、晴れてその美質を發揮する。その姿は点線部「下人などは、目につきてめでたしとは思へる」と記述され、盛儀を見物する側から盛儀の当事者になり賞賛される側となっている。

『若菜下』の住吉詣は「住吉の御願かつがつはたしたまはむとて、春宮の女御の御祈りに詣でたまはむとて」という趣旨で行われたものである。光源氏が娘の将来を住吉社に祈願していたが、娘が女御となり、孫が春宮となったことによる願ほごきである。その際、光源氏は、明石入道が遺した「かの箱」に収められた明石の一族の繁栄を願った

住吉社への願文に目を通してしている。『若菜下』の住吉詣は、いづれ春宮が即位し、明石女御が国母となり、「碧玉簾中裁錦妓」と詩によまれるような皇后となる明石一族の栄華を予祝する場面でもある。

住吉社において、「錦」を思わせる彩りとともに描写される松は住吉社のご神威を示すものであるが、入道の願かけによる住吉社の申し子といえる明石上のそばには常に松が存在した。明石の松、大堰の松、六条院の「み蔵町」の松がそれである。社頭の松と「錦」にたとえられる彩りの調和は、かえりみられることのない「錦」とたとえられた明石上に代表される明石一族の栄華を示すものであるのだ。

#### 四、まとめ

これまでみてきた『源氏物語』中の「錦」のたとえを本文のあらすじに沿ってまとめてみる。

「若紫」では、北山の春の本草の花を錦にたとえていた。歌語、詩語の常套句ではあるが、筆者はここに「織らぬ錦」の靈妙さを加味し、北山という土地の神秘性を表すものとした。この靈妙な北山で光源氏は病を癒し、明石上の噂を聞き、後の紫上、若紫と出会う。

明石上は「明石」で光源氏と結ばれるが、光源氏は单身、

帰京する。「澤標」で明石姫君を出産するものの、親子の存在は、人知れぬ「錦」であり、住吉社に詣でた時に光源氏一行の住吉社社頭における秋の紅葉の錦を再現したような人々の姿を目撃し、彼我の違いを悲しむ。「松風」では明石上親子と尼君は大堰に移り住む。桂の院での光源氏の宴の祿を用意し、秋の紅葉の錦にたとえられる男性たちによる美景の形成の一翼を担う。

「初音」では、六条院での男踏歌見物の女性達（紫上、明石姫君、明石上を含む）の出だし衣のあでやかな美しさが「曙の空に春の錦たち出でにける霞」と表現される。光源氏の繁栄は霞の衣をまとう仙女のような女性たちによって支えられている。

「胡蝶」では、六条院の船樂が描かれ、女性たちの容姿美しい装束が「花をこきまぜたる錦」とたとえられ春の美景を形成する。秋好中宮と春秋の優劣を争っていた紫上は、この船樂の盛大さにより勝利する。

「藤裏葉」では、冷泉帝、朱雀院が六条院に行幸する。

六条院の美しさは、「夕風の吹き敷く紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見まがふ庭の面」と描写される。紅葉を錦にたとえることは常套句であるが、ここは光源氏が渡殿にひいた錦にたとえられており、あたかも光源氏が美景を作りだしているかのよう描かれている。

「若菜下」では、光源氏は紫上、明石上、明石女御、尼君をつれて住吉社へ一族の栄華に対するお礼参りをする。そこでは盛装した源氏を慕う男性たちにより、紅葉の錦が再現され、盛装した女性たちの出だし衣は花の錦を再現し、その姿は住吉社の松を背景に一段と映えるのであった。

「澤標」、「若菜下」の住吉社頭での宴の場面、「初音」の六条院での男踏歌の場面、そして「胡蝶」における六条院での船樂の場面は光源氏が権力を掌握していることを示す重要な場面である。そこでは光源氏を慕って集った人々の様子を錦のような彩りの自然の美景とたとえる。春秋の花の錦、霞の錦、紅葉の錦はいずれも自然の妙が織りなす人為を超えたものである。それを再現する光源氏には天の造化を作り出す、靈妙な力があるのだ。

その光源氏を支えるのは、六条院で「春」を体現している紫上と、桂の院や住吉社で秋景を再現する明石上なのである。『源氏物語』にみえる「錦」の比喻をたどると、光源氏が人並み外れた能力の持ち主であることが窺える。また、光源氏の栄華を支えた紫上、明石上もそれぞれ春秋を再現する能力を持つ特別な女性であることが分かる。

#### 注

(1) 『源氏物語』、その他の引用は、ことわりのない限り、新編

日本古典文学全集（小学館）による。私に適宜傍線を施した。また、和歌の番号は『新編国歌大観』による。表記は私に改めた場合がある。

- (2) 『紫明抄』、『河海抄』の引用は、玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』（角川書店・一九六八年）による。

- (3) 『源氏釈』、『奥入』、『紫明抄』、『河海抄』は「春の花の錦」の注として、『蒙求』の「季倫錦障」の故事をふまえた一節、「晋石季倫居金谷、春花満林作五十里錦障」（出典未詳）を引く。『源氏釈』は『又文集草堂記』とも注をする。『奥入』は『文集草堂』として白居易の「草堂記」より「春有錦繡谷花、夏有石門澗雲、秋有虎溪月、冬有鑑峰雪」を引く。『河海抄』は「季倫錦障」の故事をふまえた一節の後に「逢春不遊樂、恐是無心人」という一節を引き、「楽天」と記し、白居易の作とする。また、『紫明抄』は「薄雲」

の「春の花の木をもうへわたり秋の草をまほりうつして」という本文の注として白居易の「草堂記」より「奥入」と同じ箇所を引く。『源氏釈』は田坂憲二編『源氏釈諸本集成』（権歌書房・一九八七年）、『奥入』は日本古典文学影印叢刊19

- (4) 『奥入 原中最秘抄』（貴重本刊行会・一九八五年）による。渡辺秀夫『詩歌の森 日本語のイメージ』（大修館書店・一九九五年）V章の「もみじ」参照。

- (5) 『懷風藻』の引用は、辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院・二〇一二年）による。

- (6) 『文華秀麗集』の引用は日本古典文学大系（岩波書店）による。

- (7) (4)に同じ。

- (8) 『河海抄』は第一句「ふゆになり」、第七・八句「山をもい

りてもいたらず」、第一五句「あをばをば」、第一七句「そこらうらみし」として額田王歌を引く。新聞一美『源氏物語の構想と漢詩文』（和泉書院・二〇〇九年）第一部第V章「源氏物語の春秋争いと元白・劉白詩」は、梅枝巻で入内する明石の姫君のために螢兵部卿官から醍醐天皇宸筆の古今集とともに「嵯峨の帝の、古万葉集を選び書かせたまへる四巻」が贈られていることを挙げ、「薄雲」の当該箇所について、「女性の教養として万葉集が重視されていたことが知られるので、額田王歌を引いている可能性は充分にある」とする。

- (9) (4)に同じ。

- (10) 以下、「紅葉の錦」を詠んだ古今六帖所収歌と古今歌、後撰歌の対応関係を記す。(一)内に古今歌、後撰歌の番号を記す。三五一六番（古今・二九一番、三五一七番（後撰・三八九番、三五一八番（後撰・四〇三番、三五一九番（古今・二九六番、三五二〇番（後撰・四〇八番、三五二一番（後撰・四五四番、三五二二番（後撰・三八八番、三五二三番（後撰・四〇四番、三五二四番（後撰・四〇九番、三五二六番（後撰・四一〇番、三五二七番（古今・二八三番、三五二八番（後撰・四二二番、三五二九番（後撰・四一五番）。

- (11) 「この家の垣根の紅葉、からくれなゐを染め返したる錦をかけて渡したると見ゆ」（菊の宴、「錦のごとく散りたる紅葉の上を歩み出でたまふ」（国護下）。

- (12) 新聞一美『源氏物語と白居易の文学』（和泉書院・二〇〇三年）第四部I章「源氏物語と廬山―若紫巻北山の段出典考―」で「若紫」巻への白居易の「草堂記」の影響を論じ、「錦を敷けると見ゆる」は、「草堂記」の「錦繡谷」をふま

えたものとする。

(13) (4)に同じ。

(14) 『類聚句題抄』では、「花の錦は機を須<sup>もち</sup>ひず」という、この題で菅原雅規(一二六番)、大江朝綱(一二七番)、兼明親王(一二八番)、菅原庶幾(一二九番)が詩を詠んでいる。番号は本間洋一『類聚句題抄全注釈』(和泉書院・二〇一〇年)による。

(15) この部分の『本朝麗藻』の引用は川口久雄・本朝麗藻を読む会編『本朝麗藻簡注』(勉誠社・一九九三年)による。

(16) 『源氏積』、『奥入』、『紫明抄』、『河海抄』は「斧の柄は朽ちなばまたもすげかへむ浮き世の中に返らずもがな」(古今和歌六帖・第二・山・をのえ・一〇一九番)を引く。また、『河海抄』は『述異記』も引く。

(17) 森野正広『源氏物語』松風巻の大堰訪問における爛柯の故事引用と時間の歪み」(日本時間学会『時間学研究』第八巻・二〇一五年三月)は、「光源氏の大堰・嵯峨野・桂を経巡る小旅行もまた、それが「斧の柄の朽ちる時間」というフレームによってかたどられている以上、この「異郷での時間はゆつくり進む」という命題から免れるものではなかった」とする。また、大江匡衡の『江吏部集』(二四番・九月尽於秘書閣、同賦秋唯殘一日詩。一首)に「洞中合宴忘家郷、秋抄只携一日光、今夕階蓑雖落尽、明朝離菊有餘芳、爛柯不識殘陽景、後葉空逢七葉霜、已到詩仙心事足、侍郎佳興過潘郎」とあり、秋景を味わい、時を忘れることのとえに爛柯が用いられている。『江吏部集』は柳澤良一編『石川県立図書館蔵川口文庫善本影印叢書3 江吏部集・無題詩』(勉誠出版・二〇一〇年)による。

(18) 小林正明「蓬萊の島と六条院の庭園」(『鶴見大学紀要』二四号・一九八七年三月)、上原作和「爛柯」の物語史、「斧の柄朽つる物語の主題生成」(『講座平安文学論究』十二輯・一九九七年)、田中幹子『和漢朗詠集』とその受容」(和泉書院・二〇〇六年)第二章三「源氏物語「胡蝶」の巻の仙境表現・本朝文粹巻十所収詩序との関わりについて」、田中隆昭「仙境の六条院」(『国語と国文学』一九九八年一月)等。

(19) 『新撰万葉集』は新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈巻上(一)』(和泉書院・二〇〇五年)による。

(20) 田中幹子『和漢・新撰朗詠集の素材研究』(和泉書院・二〇〇八年)第一章「霞」について付「千載佳句」眺望「碧羅」および『和漢朗詠集』春興「碧羅」の影響」

(21) 今浜通隆『本朝麗藻全注釈一』(新典社・一九九五年)による。

(22) 「若紫」で二条院にひきとられた若紫が「四位五位こまぎに隙なう出で入りつつ」という情景をみているところに対して「紫明抄」、『河海抄』は「見わたせばやなぎさくらをこきまぜてみやこぞ春の錦なりける」を引く。桂の院や六条院ほどはつきりと「錦」のような美景とは明記されていないが、色鮮やかな衣の家来が入りする二条院も六条院同様、仙境に準ずる場所といえるか。

(23) 本文に挙げた「濡標」の「松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆる袍衣」の「花紅葉」は「秋の花」と「紅葉」と解することもできるので、これも秋の花の錦をいう可能性がある。

(24) 北山の神秘性については、多くの先行論文がある。(12)等



参照。

(25)

六条院の紅葉の美しさを朱雀院は「秋をへて時雨ふりぬる  
里人もかかる紅葉のをりをこそ見ね」と羨み、この歌の返歌  
として冷泉帝は「世のつねの紅葉とや見るいにしへのためし  
にひける庭の錦を」と詠む。六条院の紅葉の美しさは、かつ  
て桐壺院が帝、朱雀院が東宮であつた頃、光源氏が青海波を  
舞つた紅葉賀、「いにしへのためし」に倣つたものとする。  
結果として、六条院の紅葉の美しさは桐壺院の盛儀に匹敵し、  
「世のつねの紅葉」とは比べものにならないと褒めている。